

中部菱肥会実務者研修会開催

4月8日9日、中部菱肥会実務者研修会が名古屋にて開催された。出席者は当社スタッフ、特約店・協賛メーカー含め18名が出席。研修会1日目は「強い営業組織の作り方研修」をテーマに社団法人中部産業連盟 営業チーム強化コンサルタント庄司充氏を講師に招き「強い営業組織の作り方研修」と題してチームを目標達成に導くためチームのリーダーとしての必要な考え方、チームでの取り組み方等について研修を行った。継続成長するためにはチームワーク強化が必要とされ、またリーダー的な役割を發揮するスタッフが必要と説かれた。内容としては①リーダーの役割とは②チームを動かす行動とは③チームマネジメントとは④ダメなチーム、ダメな



研修1日目でのグループディスカッション

チームリーダーの特徴について⑤営業マンが育ち確実に目標を達成する「定例ミーティング」の運営の仕方等具体例を元に実践的なグループ討議が行われた。

2日目は三菱商事㈱農産油脂部齋藤マネージャー（米取引総括）より「飼料米の流通事情、生産／販売動向」について、弊社米穀部増田部長より「コメの消費動向、25年産在庫～今後の見通し」について解説。参加者からは「勉強になった」「明日から何か実践してみたい」等前向きな発言が多く聞かれた。今後も会員の関心の高い話題をピックアップし企画立案していきたいです。（名古屋支店）



庄司充講師

企業の農業生産参入（第2弾）

気象条件を生かした農場経営

加工カット野菜メーカー サンポー食品株式会社

No. 247号より企業の農業参入の取り組みを紹介している。第2弾目として食品加工メーカーによる農業参入の取り組みをご紹介したい。今回ご紹介する会社は京都市に本社を置くサンポー食品株式会社だ。サンポー食品が何故農業生産現場に進出したのかを同社取締役常務野口修氏にお聞きした。

編集局：貴社が農業生産法人を立ち上げた理由をお教えてください

野口常務：創業者が地域農業の活性化を理念において設立しました。企業自らが率先垂範して農業を行いたいと思ったからです。農業で利益の出る仕組みを作る事で農業のあり方を追求できるのではないかと考えております。

編集局：農業生産法人サンポーファームの経営規模と常勤スタッフ数をお教えてください

野口常務：自社農場で15ha、契約生産者で5haの合計20haです。常勤で社員が5名、パート社員が8名在籍しています。

編集局：何故南房総市に農場を立ち上げたのですか？お聞かせください

野口常務：冬期でも温暖な気候でブランド野菜作りに適している地域ですが、一番は衰退していく産地復興のためです。

（次ページへ続く）

(前ページより続く)

編集局 : 現在作付されている作物と何故栽培されているのか教えてください

野口常務 : 自社農場では秋冬玉・リーフレタス、キャベツを春夏ではとうもろこし、かぼちやを栽培しています。契約農場ではリーフレタス、ナバナ、キュウリ、水菜を栽培しています。関東の消費地に近い地の利を生かした南房総市でレタスの産地形成を、また寒玉系キャベツで一番栽培しづらい時期に栽培することにより他の産地より鮮度が高く安定的に商品をお客様にお届け出来るのではないかと考えたからです。トウモロコシとかぼちやは関東地区で一番早く出荷できる可能性がありブランド化を狙っております。

編集局 : 自社の農場で生産する最大のメリットは何であるか教えてください

野口常務 : 安全・安心な野菜の安定供給です。また、食品加工メーカーである弊社の特徴を生かした市場ニーズに対応するマーケットインの商品開発が出来る点です。

編集局 : 今年のキャベツとレタスの作柄は如何でしょうか

野口常務 : レタスでは10月の台風27号の影響により12月、1月前半作のレタスの安定出荷は難しかったです。それ以降は収量も目標値を超える出来栄でした。キャベツは同じく台風の影響と12月の寒さが響いて小玉のものが多かったですね。

編集局 : 肥料の試験を実施なされておられますが、目的をお聞かせください

野口常務 : 安全で美味しい野菜栽培の為に適正な施肥により環境負荷の軽減を行い持続的な農業を実践するために必要と考えております。

編集局 : JGAP農場を取得されていますが取得された理由をお聞かせください

野口常務 : 食の安全の確保の観点から安全性を限りなく高めて行く為の手法として取得しました。また、農業を経営的な視点から見た農場管理を実践するために取り入れました。

編集局 : 農場経営において悩みがありましたら教えてください

野口常務 : 地域特性もあるのですが、現在賃借している一枚当たりの圃場面積が小さく生産効率が高まらない現状を抱えています。中間管理機構が立ち上がる計画となっておりますが農地の集約化が必要と考えております。天候リスクへの不安要素が高まる中で安定生産が現実的な問題として捉えております。その解決方法を補助金の有効利用や地域ぐるみでの対策検討、他の産地の良い事例の導入等にて補っていきたいと考えております。

編集局 : 本号をご覧になられた方々や肥料業界において何かメッセージがありましたら宜しくお願い致します

野口常務 : 農業・商工業・研究機関との方々との連携により農場における技術力の向上や商品開発を行う事によりお客様の満足度向上を図られるのではないかと考えております。

編集局 : ありがとうございました



農業生産法人有限会社サンポーファーム白浜農場

千葉県南房総といった気象条件と関東の大消費地に近く地の利を生かした自社品のブランド形成と産地復興が現地生産に進出した理由となっている。ほか契約産地と地元資材販売店や供給メーカーと連携しより良い作物栽培を探求されている点は企業農業法人として参考になる取組方法となっている。経営も黒字を達成されておられるが更なる生産効率を上げる方法として栽培場所の集約と畑1枚当たりの大規模化が必要とされており農業法人が抱える共通の問題点を持たれている。今後の益々の発展をお祈り申し上げます。



農場スタッフの皆さん

桜前線も北上し、東北地方が見頃を迎えている頃ですね。最近では寒暖差が激しく、体調を崩す人も多いです。服装は調整がきくものを上手に使って、風邪などひかないように、ご注意ください。

編集事務局：南部、助川